

スニユニ

シネスコ版

高知新聞ニユニ No. 229

新潟新聞ニユニ No. 157

中野新聞ニユニ No. 170

真夏の味覚

-ビワの出荷-
六舟

78

77へ

38.7.5

No. 494

一、騒音の谷間

——羽田界限

航空界に新しい世代を開いた、ジェット旅客機の夢のようなスピードと巨大さは、ジェット、エンジンの暮あけに手に負えない兇暴なやつにまで成長していました。所謂これがジェット騒音なのです。

ジェット騒音によるさまざまな災害は、軍事飛行場周辺では、かなり早くから問題となつて提出されたが、そうした飛行場は、都会とはかなり離れた地域に設けられていたため、さほど大きな社会問題にまで発展しなかったのです。しかし今度は都会そのものが被害を受けているのです。

現在国際空港として開けた羽田は、一日の運航回数は百八回、うち三分の一に当る三十五回四十運航が国際線、つまり大型ジェット機なのです。

この数字はジェット機の運航が幾何級数的に増加している事を証明し、裏返すとジェット騒音禍の膨張を物語っているのです。

この大森第五小学校は授業のたびに中断され、その音は空気を引きまくような金属音が耳に入ります。

急激に高まり、続いて地鳴りのような重い音、つぎに瞬間には巨大な不協和音のルツボにたたき込まれるのです。人間の存在が完全に無視された騒音は約一分間。教室では先生も生徒もただ音の遠去かるのを待つのみです。

町内の人々も「安眠が出来ない」「病気の工合が悪化するのみ」と訴える人が多いのです。このようなジェット騒音禍のありさまを、羽田国際空港ジェット騒音対策委員長の白田新之助さんは自から町内の人々と都庁や国会にまで行って陳情に出掛けて行くのです。

即ち「深夜飛行禁止」「離陸直後の右旋回厳守」。しかしこうした大きな社会問題となった羽田界限には今もおジェット機が美しい機体を現わすとともに、今日も残酷な凶暴な音を立てて飛び続けているのです。

アイモ風土記

一、明日を造る村

——常陸太田(茨城)

丘陵に発達した茨城県常陸太田市佐竹地区は、その昔佐竹の城下町として栄えて来た田園地帯なのです。豊富な米麦地帯と共に、かつては薬工業も盛んであったこの地方も、やがて経済成長の波にのり若い人達は農業から工場へと移行し、時代の流れとともにその衰微の一端をたどって来たのです。そして今となっては、名実共に農業のない手になった主婦のみが、重い荷を背負う運命となったのです。

こうした折から生活への合理化も、地元の婦人会の提唱によって盛り上がり、生活改善の発端として新しい村造り運動が始められたのです。

特に生産面に於いて、これまでの米麦に依存した農業から脱皮して、養鶏、野菜、果樹、園芸などを大きくとり入れられた農業と移行しつつあるこの実体は、婦人の労働力も自から軽減され、更に一步進め合理化する事によって、人間関係をより親密化し、豊かな生活を築こうとするこの願も、やがて明日への希望として生きて行くのです。

64-202 289

262